
忘却

issei

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

忘却

【コード】

N1320K

【作者名】

i s s e i

【あらすじ】

短編のため略、ご了承ください。

並木道は、ほんの一週間で冬の景観に様変わりしてしまった。

赤や黄色、豊かな独自の衣で身を包んでいた木々は、人工的に飾られた光のアーチを身に纏わされている。

中村翔は衣替えを済まされた並木道の外れにあるお気に入りの、小窓から横浜の海が一望出来るカフェにいつも通りに入った。

中村の顔を見ると一瞬笑顔を浮かべた店員は、厨房へ声を掛けるとレモンティーを一つ持ってきた。

停電で電化製品の電源が切れるかのように不意に大切な人の心が消えていったあの日から二ヶ月後、この並木道の外れにあるカフェで窓の外を眺めながら過ごす時間が中村の休日の一部になっていた。

「レモンティーはいつも通り、お勧めの氷少な目のガムシロ一個にしておきました。」

いくらか顔なじみになった、小柄な店員がからかうような笑顔を浮かべて話しかける。

笑顔で相槌を打ちながら代金を手渡す中村に店員は続ける。

「店長から中村さんがこのお店にいらっしやるのは今日で最後だと聞いたんです。」

無垢な表情のまま尋ねる店員に、返す言葉を失った中村は外の景色に視線を逃がした。

カギ形に象られた部屋には、隣接する幼稚園から軽快なピアノの音色と共にお昼寝を終えた園児の元気な合唱が窓を通し流れ込んでき

ていた。

純白のシートが掛けられたセミダブルベットの上で川瀬沙紀は、ゆ

っくりと心音に合わせて胸を上下させていた。

沙紀が眠りについたのを見届けた中村は、ずっと握ったままだった手を離すと寝室の床に放り投げたままになっていた、まだ少し、暖

かそんな血液がついた十二番を拾い上げると湿らせた八番で丁寧に拭いた。

部屋は、年頃の女性が住んでいるとは思えない程に無色で全てのものが床に直接腰を下ろしていた。

中村は、元あった定位置に綺麗に拭いた十二番を戻し、埃を被った十三番をずらすとその場に座り込んだ。

「落ち着け。」

途端、中村の口は本人の意思とは関係なく勝手に動いていた。

まるで会社の倉庫だな、初めてこの部屋を訪れた時にそう感じた。

玄関を開けてすぐ目の前に広がるリビングには、最低限の生活用品が会社の備品倉庫の様に並べ置かれていた。

棚を置くことを勧めた事はあるが、沙紀はこの状態が暮らしていくのに一番便利で解りやすいらしい。

「何処に何があるか一目でわかるし、物が勝手に移動したらすぐに気付けるでしょう。」

それが沙紀の言い分だった。

物が意思を持って勝手に移動したら怖いな、とからかうつもりで話した中村の言葉に沙紀は薄らと口角だけを上げた頬笑みを返してきた。

今となっては物にある本来の呼称で呼ぶよりも、物の置かれた場所の物番号で呼び合う日常が中村にも定着しつつあった。

しかし、傍から見たら全てがオーブンに感じるこの部屋には、他人が触れてはいけない禁止区域がある事を中村はこの部屋に初めて訪れた時に知った。

禁止区域といっても堅い鋼鉄の箱に南京錠でカギをかけてあるわけでもなければ、一線を越えて踏み込むと警報が鳴り響くわけでもない。

物番号、二十四番のピンクのハンカチが掛けられた、茶色の籠が禁止区域だった。

初めて訪れた際、唯一ハンカチが掛った籠の中を覗こうとした時だった。

「やめて、ね。」

すぐ耳の裏側から聞こえた沙紀の声、もつと言えはすぐにも部屋の中から逃げ出したくなるような残酷な響きを含んだ息使いを背後に感じた瞬間、二十四番はこの部屋の影となり、以来中村にとつての禁止区域となった。

しかし：中村は目を瞑り先ほど起きた出来事をゆっくりと、そして出来る限り鮮明に思い返そうとした。

そう、沙紀に昼ご飯を用意していた時だった。

寝室の方から鈍い金属の落下する音が聞こえた。

この家では物が落ちるといふ現象は、沙紀か中村が何かを落とすとき以外にあり得ない。その事が定着している中村は、ざっと床に並べられた物を確認する。

一番、二番、三番、四番：無い、十二番の立ち切り鋏が消えていた。

「沙紀、十二番持って行った？」

返事はなかった。

一旦料理の手を止め、寝室に向かう中村は手に汗を握っていた。

物が意思を持って移動する事はない、だとすれば沙紀が俺を驚かそうと隠れている気がしたからだ。

しかし、実際は寝室には沙紀の姿はなく十二番も落ちてはいなかった。

変わりに寝室に入ってすぐにあるトイレから光が洩れてきていた。

「トイレで昼寝はするなよ」

茶化しながらドアをノックするがやはり、中からの反応はなかった。中村がドアノブに手をかけすぐに内鍵が掛けられている事に気が付いたのとはほぼ同時に中から内鍵が外され、ドアが開いた。

そこには左手に刃が開いたままの十二番握り締め、お揃いの寝巻を着た沙紀が下を向いたまま立っていた。

白いタイルの床には幾つかの赤い斑点、それは沙紀の右手から床に向かつて静かに垂れていた。

そこから先の事を中村はあまりうまく思い出せずにいた。沙紀に何かを言ったとは思う。

そして、沙紀の左手から十二番をもぎ取り寝室の床に放り投げた。沙紀をただ抱き締めた、体が震えていたのは中村だった。

傷口は深くなかった、と思う。

数か所の躊躇い傷の他に、薄らと紅い肉が覗いていた傷もあったが、病院に行く事を頑なに拒まれた中村は応急処置として、リビングにある三番と四番、そして十七番を使って手当てをした。

沙紀はずっと無抵抗で中村の手当てを受けていたが、四番を巻き終わるとそのまま立ち上がり二十四番に掛ったハンカチを投げ捨て中から錠剤を取り出し、二番に水を入れるとそれを飲み干した。

その時、裸になった二十四番の籠からこちらを覗いている物が中村の視界に入った。

小さな淡いブルーの便箋、そこには紛れもない沙紀の字で中村のあて名が書かれていた。

沙紀は何か錠剤を飲み終わると台所で蹲り、動かなくなってしまうた。

眠っている訳ではなく、まるで何かに抗うように眉間に皺を寄せ不安定な呼吸を繰り返していた。

中村は沙紀を抱え寝室まで運び、ベッドに寝かせると毛布を掛け、沙紀の右手を握り締めた。

そうだ、便箋。

中村は、目を開くと躊躇いなく禁止区域へと手を伸ばしていた。折りたたまれた便箋は、所々滲んでいる上にペンで書いたのだろうか、消せない部分が黒く何重にも塗りつぶされていた。

翔へ

この手紙をあなたが読むときに私はこの世にいないでしょう。

お涙頂戴みたいな映画や小説は大嫌いだけど本当の話。

自分で書くのも嫌なんだけど病気がらしいの、心の。

何て書けば伝わるのかな、私の心の中に何人も違う私がいって叫ぶんだよね。

毎日を生きたいって。

最近は、あなたと過ごす毎日すら本当に私が生きているのか曖昧になってきて。

だから、部屋の物が勝手に移動していかないかを毎日、毎日確かめられるようにしておかなきゃいけなかったの。

もし心が、私じゃない時間があった時に気が付けるように。

たぶん、このまま私の心はあなたと過ごした記憶と一緒に消えていくと思うんだ、すごく自分勝手だけど、ごめんなさい、だけどもう限界みたい。

消えていくって死ぬ事とは違うけど、殆ど同じだよ、もうあなたと再び出会えても何も解らないんだもん。

怖いよ、心が徐々に無くなっていく感覚が解るの。

寂しいよ、あなたと笑い合う日常が無くなるのが。

次の文章に目を移そうとした瞬間、便箋が消えた。

振りむくと、いつ目を覚ましたのか沙紀が何の感情もない目で俺を見下ろしていた。

中村が止めるよりも早く便箋を破り捨てると、沙紀の口が開いた。

「やめてねって言ったじゃない」

その言葉は、いつか聞いた残酷な響きはなく、深い悲しみに覆われた言葉に近かった。

そして、沙紀はそのまま倒れ込むように中村の体にしがみ付いてきた。

ごく自然に、それは今まで沙紀を抱きしめてきた中でも一番とてもいいほど優しく、殆ど無意識に沙紀を中村は抱きしめ返していた。

耳元で沙紀の声が聞こえた。

「いつか、私が違う男性と街を歩いているのを見掛けても嫉妬しないでね。」

手紙の内容も、沙紀の心も何も理解出来ていないはずの中村の頬には、幾筋も涙が痕を残していた。

沙紀は一拍間を置いて、安定した呼吸のまま言葉を紡いだ。

「だって私の心の中ではいつまでも翔が、世界のどんな素敵な男性よりも愛おしい人だから。」

それだけ言うと沙紀は、中村から体を離し、俯いたままひとり言うように呟いた。

「私の事を迷惑じゃなければ覚えていてほしいな、だって翔がもし私が存在していた事を忘れちゃったら、本当に私は死んじゃうから。」

もう一度、沙紀を手繰り寄せようとした中村の腕をすり抜けるように、まるで逃げるように立ちあがった沙紀は、中村が発するだろう言葉ごと家から追い出すと、玄関に頭を抱え込みながら座り込んだ。そして、まるで自分に言い聞かすように喋った。

「後少しだけ待って、駄目、まだ消えたくない。」

顔を上げた沙紀は強く、言葉を発した。

「もう、二度とここへは来ないで、さよなら。」

店員は小首を傾げながら、黙ってしまった中村の返答を待っているようだった。

既に、目の前に置かれたレモンティーは氷と混ざり、本来の味は楽しめそうになかった。

沙紀：お前はいつも言っていたよな。

レモンティーは氷少な目、ガムシロ一個が一番美味しい飲み方だつて。

その根拠のない自信は何処から湧き出てきていたんだ。

何度も考えてきたはずの最後の答えが中村の心を揺さぶる。

だからこそ、もう二度とあの日には帰らない。

「少し早いけど誕生日おめでとう、川瀬さん。」

中村は右ポケットに忍ばせていた小箱を取り出し、驚いた表情のまま固まっている店員の左手へ、そっと小箱を乗せる。

「店長から聞いたんだ、それと川瀬さんのお陰でここに座ればいつでも、美味しいレモンティーを楽しめたから。」

中村は出口に向かいながら、最後の答えをあの日の心へと届ける。

「今まで、ありがとう。」

外の木々は、新しい季節を迎えるために芽吹く準備運動を始め、静かに躍動しているかのように中村は感じた。

(後書き)

二度と出会えないあの笑顔に、ありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1320k/>

忘却

2011年1月16日00時12分発行